

目的：アイヌ民族服飾には、アイヌの人々の美的センスと繊細な技術によって独特の文様が表現されているが、衣服の構成は平面的であり、その多くは単仕立てである。本研究では、衣服の基本となる構造や寸法、縫製技術について資料63点の実測調査を行い結果をまとめる。

方法：衣服の形状、損傷部位の有無を記録し計測を行う。衣服各部位の計測には、形状により計測項目を9-13とし実測値を求める。縫製の調査は、縫合部、始末法、縫い糸と針目数の関係から5cmを単位とした針目数を観察し技法の巧緻性を判別する。

結果：実物調査資料63点のうち、アツシは5点、他は綿織物で、多くは単仕立てである形状は和服の半纏に近似し、直線裁ちで、身頃、襟、袖（もじり袖、筒袖）の各部分から構成されている。資料の一部に襤つき衣服があり、形状も様々である。身丈は着用者の身長によってことなるが凡そ107.5から129.5cmで対丈かそれよりやや短い。衣服各部位の実測値から左右差がみられた。縫製は全て手縫いである。縫製の基本となっている縫合部の並縫い、かがり縫い（巻き縫い）には粗密があり技術の巧拙が観察された。縫合部や始末法に和服のような特定のきまりはみられない。文様の繊細な刺しゅう、かがり縫いに比べ衣服の製作に落差がある。